

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

マツコム オンハンドPC!

…マツコムっていったい…、(´ー`)ノ

レトロな玩具の
おはなし

最近、懐かしさの余り、某オークションにてレトロな玩具（おもちゃ）をたて続けに購入してしまった。いつものように何気なくオークションサイトを徘徊していたところ、たまたま「ロケット弾」なる出品物を発見。見た途端、小学生の頃、空き地で投げた遊んだ思い出が突然甦る。これをトリガとし、昔遊んだおもちゃ類を検索してみたところ、いやもう出てくるわ出てくるわ！ まだこんなに残っていたのかと、そりゃもうびっくりするやら懐かしいやらだ。しかも、中には倉庫にデッドストックされていたと思しきものもあり、資料的価値としても高い。

というわけで、今回の前フリでは昭和30年代初期製造である筆者の心をとらえてしまったレトロ玩具を取り上げてみよう。本誌の読者層はもう少し若い世代が多いと思われるので、中にはあまり馴染みの無いものもあるかもしれないが、それはそれで今見ても楽しいものではないだろうか？

ロケット弾 (写真a)

まず最初は、これ。「ともだち」印のロケット弾だ。台紙に24個貼り付けられている。先端の弾頭部分に、紙に巻かれた火薬をセットして投げかけると、着地時に「バン」と音がするというものだ。商品をマウントした台紙には

「完全ジャンプする！」と書かれている。ロケット弾本体の羽の部分には、エンボスで「TMDC」のロゴが入るが、これってひょっとして、「ともだち」印の「ToMoDaChi」のこと？ だろうな、やっぱり……、(´ー`)ノ筆者にとっては大変に懐かしい一品。

ちびっこロケット弾 (写真b)

ロケット弾の小型版である。「ちびっこトイ」と書かれた台紙に貼り付けられており、1袋2個入りで全部で24袋。桜の花に「O.T.」と書かれたマークが記載されている。ロケット弾の廉価版で、火薬を押さえる機構が金属バネからゴムに変更されており、全体に小さい。このちびっこロケット弾でも遊んだ記憶があるが、やはりメインで使ったのは大きなほうだった (写真c)。

水鉄砲 (写真d)

明星株式会社製造の水鉄砲。台紙に24個貼り付けられている。スポイト状の本体に金属製のリングが付いた構造。リングに指を通し、本体部分を手のひらに隠すようにして持ち、本体を押すと水がビュッと出るといったシロモノだ。よくこれで水のかけっこをして遊んだものだ。

ベビーヘリコプター (写真e)

これも懐かしい製品、ベビーヘリコプターである。もう少し大きいバージョンもあったような記憶がする。構造は単純であるが、なかなか良く考えられた玩具だ。支柱上



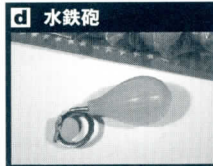
a ロケット弾
台紙に24個の商品が貼り付けられた、ロケット弾。この状態で駄菓子屋の店先に並んでいたものである



b ちびっこロケット弾
これも台紙に24個貼り付けられている、ちびっこロケット弾。ロケット弾の廉価版である



c ロケット弾 (ノーマル版とミニ版) のアップ
ロケット弾には2種類あった。左がノーマル版で、右が廉価版のミニ版



d 水鉄砲
古典的ないたづらグッズの一つ。本体がスポイトの役目をし、狙いを定めて水を飛ばして遊ぶ



f CAMEL印のビー玉 (特大錦玉)
気泡を多く含んだ、若干濁ったガラスの中に懐かしい模様が入る。作りの粗さが返って郷愁を呼ぶ



g リリアン!
一世を風靡したレトロ玩具、リリアン。これは懐かしい。編み方忘れちゃったけど、もう一回編んでみたい



e ベビーヘリコプター

単純だけど良くできている玩具、ベビーヘリコプター。本体支柱に巻き付けられた糸を勢い良く引くと、ファンが面白いように舞い上がる



h 鉄コマ
カラフルな色が付けられた鉄のコマ。かなり重い



i スーパーカーカード
スーパーカー世代には増えられない一品。カウンタックを始めとし、当時人気のあったスーパーカーが10種類程度掲載されている

部にファンを取り付け、糸を思い切り引っ張るとファンが勢いよく回転して舞い上がるというものだ。支柱の中にはゴム輪が入っており、引き出した糸を自動的に巻き上げるというギミックも付いているので、すぐにまた使うことができるという優れもの。SYRと書かれた鳥のマークが入っているが、メーカー名は不詳。構造的にも結構良く考えられた製品で、ちゃんと特許も取得している。

ビー玉 (写真f)

CAMEL印の古風なビー玉である。これは特大の錦玉で、これ以外にも数種類の大きさのものがラインナップされていた。直径2.8cmとかなり大きな玉で、昔の製品らしくガラスには気泡がたくさん入っている。ちょっと濁ったガラスの中に入った水中花のような装飾が郷愁を誘う。

リリアン (写真g)

これも当時大流行した玩具、リリアン。現在40歳台後半の方であれば、ご存じの人も多いはずだ。筆者が小学生だった頃、女の子はもとより、男の子もこれで遊んだものだから、今から考えると実に不思議な社会現象だった。商品名は「カラーニッチング」と書かれている。鳩のマークのITOというメーカー製。これは編み機本体で、別に糸を

購入してアミアミする。外箱の表記では、本体は1個5円也。20個が1ケースに入って、デッドストックされていたものだ。

鉄コマ (写真h)

「SPINNING UFO」と書かれたオール鉄製のコマ。富士山のマークの「イクエイ」という会社の製品である。1箱に12個のコマが入っており、カラフルな色が付けられている。オール鉄コマと外箱に書かれているだけあり、かなり重量がある製品だ。

世界の名車「スーパースポーツカー」東長カード (写真i)

最後はコレ！ スーパーカー世代には極めて懐かしい、「スーパーカーカード」である。外箱のLP400がなんとも迫力。しかしこの写真、日本のどっかの住宅地の、しかも万年堀の前かなんかで撮影されていて、ちょっと笑えたりする。中身は切符大のカードが40束入っている。紹介されているスーパーカーは全部で10種類程度。カードの裏側には、各車のスペックと「ゲー」「チョコキ」「パー」のマークが入る。思うに、これでじゃんけんして勝った人がカードを持って行ったんだろうねえ。当時の価格は、1束10円也。

まだまだたくさんあるのだが、キリが無いのでこの辺で。現在でもオークション市場にてデッドストックされていた物が購入できるので、懐かしく感じた方はご購入されてはいかがだろうか？ しかし、昔のおもちゃは、当然のことながら電子化率はゼロに等しい。当時はみんな、体を動かして遊んでいたんだねえ……（´ー`）yー～さて、今回取り上げるモバイルグッズは、いわば現代の電子おもちゃの商品、MatsucumのOn Handである。一世を風靡した腕時計型端末「Ruputer」の海外版として現在でも米国で入手できるマニアックなグッズをご紹介します。

🌀 1998年のこと

本題に入る。1998年6月10日、セイコーインスツルメンツ（株）（略称SII。2004年9月1日より社名がセイコーインスツル（株）に変更された）は、PCアーキテクチャを搭載した腕時計型の情報端末「Ruputer」を発売した。この製品については、当時かなり話題となったので、覚えておられる方はもとより、実際に使っていたという人も多いであろう。発売当時は、「世界で初めて腕時計にPCアーキテクチャを搭載した」と謳っており、来るべきウェアラブルコンピュータを予見させる、画期的な商品だった……と思っている（001）。

Ruputerの製品系列としては2種類あり、512KBのフラッシュメモリ搭載版のMP110が定価3万8,000円、2MBのMP120が定価4万8,000円となっていた。プログラミング環境が公開されていたこともあり、プログラマをメインにかなり話題になった製品であったが、いかんせんマニアック過ぎたようで、最後はディスカウントショップで投げ売りされる状態となる。筆者が最後に店頭で見たのは、確か田町のキムラヤで、2MB版の新品が7,980円で売られていたのを覚えている。非常に先進的な製品だ

っただけに、今思うと最後は随分衰れであった。

ところで、その後しばらくしてから、今度は米国のネットショップでRuputerの生まれ変わりをハケン！これが今回ご紹介するMatsucumの「On Hand」である。なんか、Matsucumというネーミングからして極めて怪しいが、中身は何のことはない、Ruputerの米国語バージョンだ。ただし、1バイトコードの言語専用ローカライズされているため、このままでは日本語のアプリケーションを動作させることができない。

今回は、現在でも米国で健在の海外版Ruputer、Matsucum On Handで、日本語アプリを使用するというテーマで迫ってみよう！しかし、元々日本語対応の日本の製品をベースにしているのに、なんか変な話しではあるなあ……ㄣ（´ー`）ㄣヤレヤレ……

🌀 On Hand の概要

Matsucum On Handは、目にも鮮やかな黄色い箱にパッケージングされている。箱の外側から本体とベルトの色が確認できるようになっているが、このパッケージデザインはRuputerとまったく同一だ。裏面を見ると、ちゃんと「Made in Japan」との記載があり、これが紛れもなくRuputerのセカンドソース品であることが伺われる。当然のことながら、商品の構成もRuputerとほぼ同じ。本体、バッテリーケース、ドッキングステーション、ユーザ-

表1 スペック比較

項目	Matsucum On Hand	SII Ruputer
CPU	16-bit CPU	←
OS	W-PS-DOS Ver.1.18	W-PS-DOS Ver.1.16
メモリ	ROM : 512KB	ROM : 512KB 漢字 : JIS第一、第二水準 絵文字 : 346種
	RAM : 128KB (Work RAM : 64KB)	RAM : 128KB (Work RAM : 64KB)
	FLASH : 2MB	FLASH : 512KB、2MB (Pro)
LCD 画面表示	102×64ドット LCD 16キャラクタ×5行表示	← 全角 : 8文字×5行 半角 : 16文字×5行
	ELバックライト付き	←
インター フェース	シリアル×1 赤外線×1	← ←
	バッテリー	CE2025×2
外寸	51.6×55.5×17.7mm	←
重量	52g	←
アプリケ ーション	スケジューラー	←
	アドレス帳	←
	ToDoリスト	←
	メモ帳	←
	電卓	←
	時計 (当然か！)	←
		防備録
		家族メモ
		ワールドタイム
		クロノグラフ タイマー

001



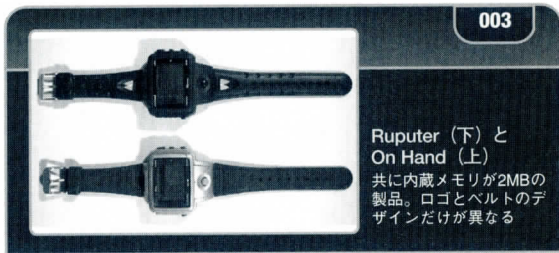
Ruputer 2MB版の 商品構成

1998年6月に発売された、SIIのRuputer。512KB版と2MB版の2種類がラインアップされていた



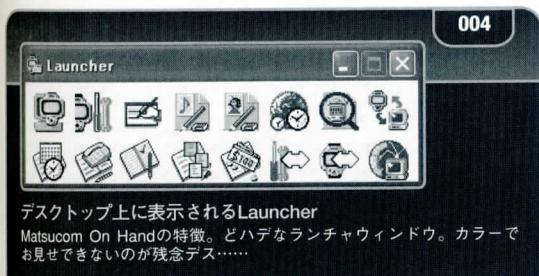
002

Ruputer (左) と On Hand (右) のパッケージ
Matsucum On Handは目にも鮮やかな黄色いパッケージ。Ruputerの上品なデザインとはまったく異なり、実用的



003

Ruputer (下) と On Hand (上)
共に内蔵メモリが2MBの製品。ロゴとベルトのデザインだけが異なる



004

デスクトップ上に表示されるLauncher
Matsucum On Handの特徴。どハデなランチャウィンドウ。カラーで見せできないのが残念デス……

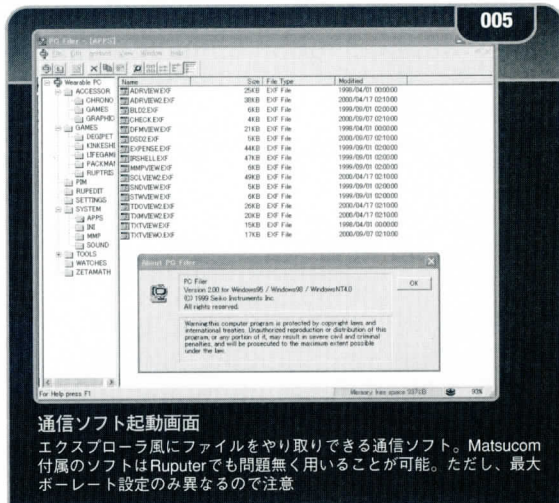
ズマニュアル、PCソフトウェアマニュアル、そしてユーティリティCDから成っている。以下に、MatsucumとRuputerの仕様比較を示すが、表向きにはOSのバージョンとプリインストールソフトの種類程度の差異しか無い(002、003)。

ドッキングステーションは、表面ロゴが異なるのみで、形も仕様もまったくRuputerと同一のもの。モデル型番がSIIがDS-10であるのに対し、MatsucumはDS-20となっている点のみが異なる。

On Handは本体内部に2MBのフラッシュメモリが搭載されているが、現代の製品のようにUSBでPCと接続できるように便利な仕組みにはなっていない。PCとの接続は、レガシーI/FのCOMポートを使い、肅々とすることになる。まず、PCに通信ソフトをインストールすることから始めなくてはならない。

インストールは簡単で、付属のCD-ROMを突っ込んで「on Hand PC Software」の項目を指定すれば良い。再起動後はデスクトップに派手な配色のLauncherが表示され、以降はこのアイコンをクリックするだけでOn Handに接続することができる。しかし、このLauncherの色とデザイン、もう少し何とかならんものかねえ…… (004)

PCとの接続には、PC側にCOMポートが必要だ。最近の省スペースPCには、このようなレガシーポートが実装されていない場合もあるので要注意。デフォルトの状態では、COM1を介して、38,400bpsのスピードで接続する。リンクソフトの画面はエクスプローラ風であり、ファイルのやりとりはDrug & Dropで気軽にできる。ただし、フォルダ(ディレクトリ)を変更する度にファイルの情報を読みに行くため、フォルダ移動には若干の時間がかかる



005

通信ソフト起動画面

エクスプローラ風にファイルをやり取りできる通信ソフト。Matsucum付属のソフトはRuputerでも問題無く用いることが可能。ただし、最大ボーレート設定のみ異なるので注意

じれったい思いをする (005)。

仕様面での相違

実際にOn HandとRuputerとを使い比べて見ると、細かい所に違いが見受けられる。スペックに明確な記載は無いが、おそらく内部クロックが上がっているものと思われる。これは、RS-232Cのシリアル転送スピードが、Ruputerでは19,200bpsが上限であったのに対してOn Handは38,400bpsと倍に上がっていることから想像できるが、実際にアプリケーションを使用してみると、体感速度が全体的にアップしているのが判る。

ファイラの表示も微妙に異なる。On Handではファイラの表示方法が2種類切り替えることが可能になっている。また十字カーソルの動作も改良されており、一番下の項目を表示させた状態で、さらにカーソルを下方方向に動かすと、メニューの一番上に戻ってくるようになった。これは、各種設定を行う上で非常に便利な機能だ (006)。

PCとのリンクソフトは、On Handに付属しているものでRuputerも使用できる。ただし、Ruputerを接続した際には、セットアップで最大通信スピードを19,200bpsに落とす必要があるが。



006

ファイルの画面

左はRuputerのファイル。内蔵メモリがBドライブとなっている。右はOn Handのファイル。フォルダのソリー表示の他に、アプリケーション表示も可能



007

ServicePack99での設定
「Appendix」セクションの「Font set」を、このように「Japanese」に変更することで、日本語対応アプリケーション起動時にも文字化けを防止することができる

凍して得られるSetupを、On Handを接続した状態で起動するだけで良い。後は勝手にやってくれる。正常に終了すると、On Hand上に「SPACK99」というフォルダができるハズだ。ここでServicePack99を起動して、「Appendix」セクションで「Fontset」を「English」から「Japanese」に変更すれば、以降2バイトコードを使用したアプリケーションが正常に表示されるようになる (007)。

さて、2バイトコードが表示できるようになれば、当然Ruputerに内蔵されているアプリケーションも動かしたくなるのが人情というものだ。というわけでRuputerの[SYSTEM] → [APPS] フォルダに格納されている、プリインストールのアプリケーションから、試しにADRVIEW.EXF (アドレス帳) とDFMVIEW.EXF (備忘録) を取り出し、On Handの同一フォルダに入れてみた。予想通り、起動させることができたのであるが、致命的な問題点がある。それは、データを入力する際に用いるソフトウェアキーボードが、1バイトコード専用のもとなってしまう点だ。Ruputerでは当然ここでかな漢字変換による2バイトコードの入力ができるのであるが、On Handでは英数字しか入力できない。ソフトウェアキーボードはファームに組み込まれているため、変更不可……。

パッチを当てる

さて、このOn Handであるが、基本構成はRuputerそのものののだが、米国仕様ということもあり、2バイトコードのアプリケーションは文字化けを起こす。以前本誌にもご紹介したが、柴隠上人 稀瑠冥閩守 (Kerberos) 氏制作によるRuputer用日本語エディタ「RupuEdit」も、そのままでは文字化けを起こし使い物にならない。しかし、元は日本製Ruputerであるし、本体のROMには漢字フォントさえ搭載されている。どうやらファームを米国仕様に変更した際に、文字コードのマッピングを変更してしまっただけで、2バイトコードの文字化けが発生するようだ。

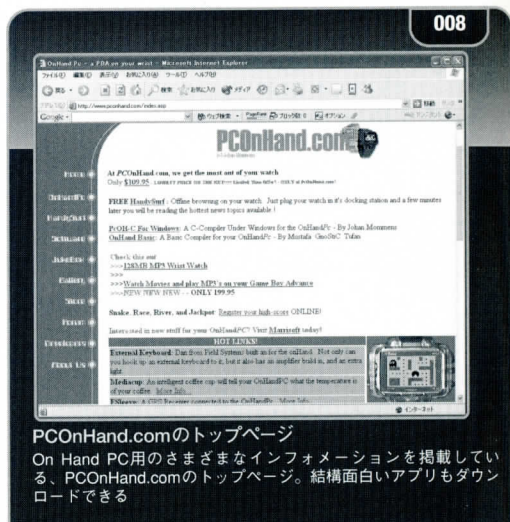
それでは、MatsucorのOn Handでは日本語が扱えないのかとあきらめてしまうのは、まだ早い。Web上に掲載されているサービスパックを当てることで、英語と日本語との文字コードをトグルで変更することが可能となる。

さっそくサービスパックをダウンロードしてみよう。On Hand用のアプリは「PCOnHand.com」というサイトにアップロードされている (008)。

● PCOnHand.com <http://www.pconhand.com/index.asp>

このサイトの「Software」のコーナーには、それぞれトリスからエクセル風表計算ソフトから、ありとあらゆるアプリケーションが掲載されている。今回、ページの下部に掲載されている「Service Pack」というソフトを使用する。このソフトは、元々On Hand上で2バイトコードを表示するために制作されたものではなく、電源の管理やLCDの反転といった、「あれば便利系」のアプリを集めたものである。「ServicePack99.EXE」という名称のファイルをダウンロードする。

パッチ操作は簡単で、ダウンロードしたファイルを解



008

PCOnHand.comのトップページ
On Hand PC用のさまざまなインフォメーションを掲載している、PCOnHand.comのトップページ。結構面白いアプリもダウンロードできる

009



ソフトウェアキーボードの比較

Ruputer (左) と On Hand (右) とでは、ソフトウェアキーボードが異なる。日本語表示用パッチを当てても、ソフトウェアキーボードは英語のみの対応となってしまう

現状では、英語版では英語入力しかできないというわけで、この点はちょっと残念ではある (009)。

RupEditをインストールする

さて、日本語が表示できる環境が構築できたので、次に本誌でも以前ちょっとだけご紹介したRuputer用日本語エディタ「RupEdit」を導入してみよう。エディタの作者は言わずと知れた奇人「柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏」である。氏は今回、Matsucum On Hand対応のRupEditを制作した。というのも、RuputerとOn Handとは、コードページの設定以外にも仕様面で細かい相違があり、これを吸収するためである。On Handでも動作するRupEditのバージョンは、v.2.01e (11 Oct 2003) であるので、お間違いのないように。

インストールは極めて簡単で、以下の3つのファイルをOn Hand上に作成したRUPEDITフォルダにコピーするだけで良い。

- RUPEDIT.EXF
- RUPEDIT.IDX
- RUPEDIT.DIC

上記3つのファイル容量は、総計160KB程度である。後はMENUにRUPEDITが登録されるので、実行するだけだ (010)。

起動させると非常にシンプルな画面が現れる。ここで十字カーソルキーを上下に移動させると、ひらがな、記号、数字がサイクリックに表示されるハズだ。例えば「本」という漢字を入力したい場合には、以下のような手順となる。

- ①カーソルが画面「.:」マークにある状態で、十字キーを下に4回クリックする。すると画面には「へほはひ

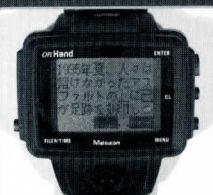
010



RupEditの起動画面

バージョン情報を表示させたところ。On Hand対応版はv.2.01e

011



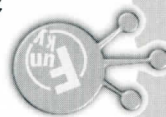
RupEditでの入力画面

十字カーソルキー、ENTERキー、ELキーを使用して、文字を入力して行く。なればそこそこ早く入力することが可能

ふ」の文字が出力される。

- ②この状態で十字キーを左に1つ移動させ、「ほ」の字に移動する。
- ③「ENTER」キーを押すと、「ほ」の字が左側に表示され、カーソルは再び「.:」マークの状態に戻る。
- ④十字キーを下に1回クリックし、「ん」の字に移動させる。
- ⑤「ENTER」キーを押して、画面左側にひらがなで「ほん」と表示させる。
- ⑥この状態で「EL」キーを押すと、「ほん」の文字が反転表示される。かな漢字変換モードに入ったので、十字キーを1回右側にクリックすると「本」と変換される。ちなみに右クリックを繰り返すと、「本」→「奔」→「翻」と候補を表示させることができる。
- ⑦「ENTER」キーで文字が確定し、エディタ画面上に「本」の文字が入る。なお、バックスペースは「FILER/TIME」キーとなっており、1回押せば入力した文字が1文字消去できる (011)。

ざっとまあ、こんな感じで文字を入力して行けば良い。文字変換に十字カーソルキーを使用しているので、エディタ上でのカーソルの移動はどのようにすれば良いかという疑問が出てくると思う。この場合、「MENU」キーを押してメニュー画面を出力させる。メニュー画面は3ページから成り、十字キーの左右方向で切り替えが可能となっている。左方向をクリックすると、「カーソル」というメニューが現れるので、「ENTER」キーを押せば、この状態で「Cursor Mode」に入る。後は編集したい文字の位置までカーソルを十字キーで移動させれば良い。移動後、





012

RuputerとOn Handで起動したRupEdit

左がRuputer、右がOn Handでの画面。表示上の相違は無いが、操作性はOn Handが上で、処理速度がかなり速くなっているのがわかる

再び「MENU」キーを押すことで、本来の入力モードに戻るようになっている。

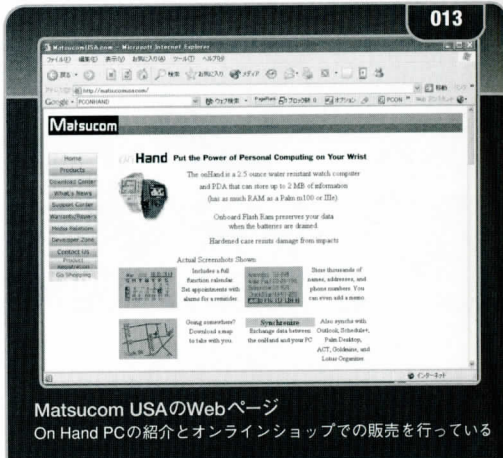
後はマニュアルを読んでほしい……っと書きたいところなのだが、実は柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏は、今まで蓄積してきた疲労が一度に爆発し、アーカイブはおろかマニュアルも作成できず現在病床に伏している状態なのだ。これも1日25時間プログラミングに没頭してきたツケが回ったことに寄るものなのだが、とにかく本人曰く「空前絶後の不調で草葉の陰に隠れるのも時間の問題か?」とかなり弱気になってしまっている。やはりカルトなソフトばかり作り過ぎた上に、ラヴクラフト全集を読みすぎたのが原因かもしれない(σ´ー)σ というわけで、実行ファイルのみまとめて筆者のサーバにアップしておくので、後は適当に使ってみてほしい (012)。

- RupEdit v.2.01e (11 Oct 2003)
<http://www.funkygoods.com/nazopa/ruputer/rupedit.html>

On Hand の入手方法

On Hand は、現在でもWebから購入することができるようだ。Matsucum USAのページにはオンラインショッピングのコーナーがあり、そこでOn Hand PCを販売している。本体価格は170.00ドルをディスカウントして139.00ドル也。Ruputer最後の投げ売り状態を見てしまった筆者としては随分と高いような感じも受けるが、現在でも新品が手に入るということを考えれば、妥当なのかもしれない。サイトは一応セキュアサーバで、VISAも使用可能だが、購入はあくまでも自己責任でね、(´ー`)ノ (013)

- Matsucum USA
<http://matsucumusa.com/>



013

Matsucum USAのWebページ
 On Hand PCの紹介とオンラインショップでの販売を行っている

Matsucumのオンラインショップが高いと思われる方には、やはりe-Bayがオススメである。若干購入までの手続きが面倒ではあるが、40~50ドルくらいで、新古品が入手可能だ。また、本家Ruputerもヤフオクなどをウォッチしていると時々見かけることがある。こちらは2MB版のユーズド製品で開始価格は3,000円程度が多いようだ。しかし、確実にタマが減ってきており、最近めっきり見なくなってしまった。

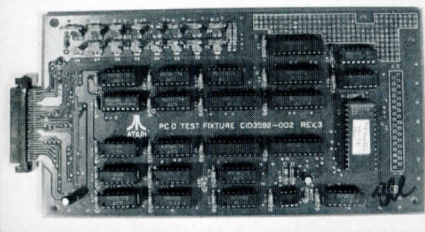
ちょっと前の情報であるが、秋葉原のどこかのDOS/VショップがMatsucum On Handを数台入荷したことがあるそうだ。ただ、ショップではサポートする手間をかけたくなかったと見え、素性不明、ノークレーム、ノーリターンで販売していた、とのことだった。注意して見れば、まだ秋葉原で見ることができるとも、無くはない。

ATARI Portfolioの怪しい基板

さて、ここから話題はガラッと変わって、いきなりATARI Portfolioに飛ぶ。ATARI Portfolioについては、本誌1999年夏号、秋号の2号連続で、本体と周辺機器を一気にご紹介した経緯がある。まあ、ほとんど出尽くしただろうと思っていたのだが、まだまだ怪しい周辺機器が存在していた。その名も、「The Atari Portfolio Expansion Port Diagnostic Card」というものだ。長すぎる名称なので、ここでは単に「診断カード」と言うことにする (014)。

この製品、e-Bayをサーチしていた際にハケンした物なのだが、マニュアル、動作保証一切無し、出品者も一体どう使うのかさっぱりワカランという優れものだったので、思わず購入した次第。購入価格はたったの16.45ドル。しかしShippingに20.00ドルもかかってしまったとい

014



The Atari Portfolio Expansion Port Diagnostic Card
Portfolio専用のレアアイテム、っていうか、こんなも一般民間人が持っているどーする！とツッコミを入れたくなるような商品

うとホホの商品だった(；´Д｀)

基板は20×11cm程度で、左側にPortfolioの拡張バスに接続するためのコネクタが搭載されている。ボード状にはシルク印刷で「PC 0 TEST FIXTURE CIO3592-002 Rev.3」との表記がある。使用部品は時代を反映して汎用のTTL ICのオンパレード。製造年は、おそらく1989年であろう。ボード上には、意味深な黄色と赤のLEDが、それぞれ8個ずつ、計16個並んでいる。

Web上で調査したところ、このカードについて記載しているページがあった。

<http://www.best-electronics-ca.com/portfoli.htm>

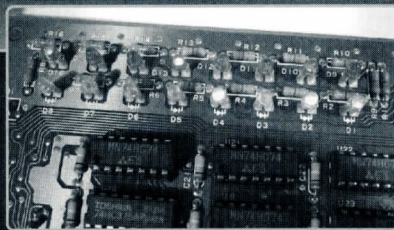
このサイトでの記載によれば、この診断カードは「Atari Service Centers」からのみリリースされていた製品で、一般小売りはしていなかったようだ。使用方法についてはマニュアル等一切の情報が無いのでわからないが、Portfolio本体右側の拡張バスに接続してResetをかけると、内部ファームウェアが本体の状態を次々と自己診断し、結果をLEDに表示するようだ。本体LCDがまったく表示されないようなマシンでも、自己診断を行うことが可能となっている(015)。

診断内容についてであるが、大きく下記4項目について行うようである。

1. 最終製品テスト用シーケンシャルテスト
2. CPUボードテスト
3. LCDボードテスト
4. キーボードテスト

実際にPortfolioに接続して使用してみたが、約2分間に渡りLEDがチカチカと点滅し、以降ホールド状態となる。このLEDの点滅によって、Portfolioの状態を把握するものと思われるが、技術情報が無いために、これ以上

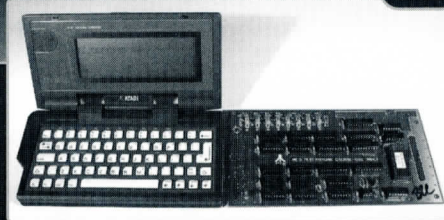
015



診断カード上に配置されたLED

本来であれば、このLEDの点滅状態でPortfolioの故障箇所を診断できることになっているのだが、マニュアルが無いので如何ともしがたい

016



Portfolioに接続したところ

Portfolio本体とは、右側の拡張スロットを介して接続する。ご覧のように大変長くなるので、取り回しがしんどかったりする

はさっぱりわからん、(´ー`)ノ (016)



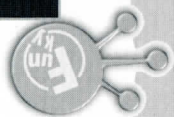
Johnの店で MC200をゲット!

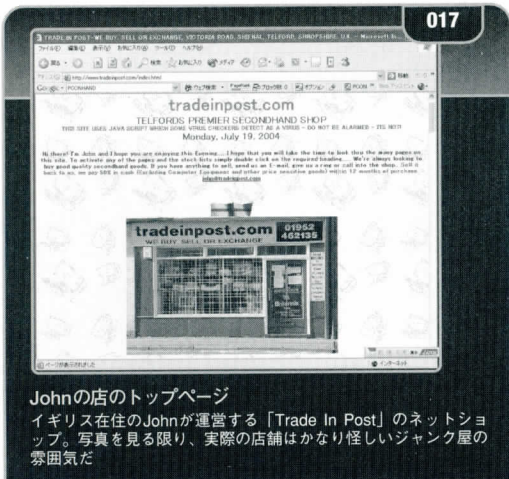
先月号(夏号)の本誌特集「ユーズドPDA活用マニュアル」のコラムにおいて、Psion MC200を2年以上に渡り探しているのだが、まだ発見できていないと記載したが、不思議なものでそのすぐ後に、ネット上のショップで販売しているのを見つけたことができた! PsionのMCシリーズは、本コーナーでも600と400を取り上げたが、実際には200という製品も存在していた。200はLCED表示エリアが小さい廉価版であり、極めて少ない数しか出荷されなかったようで、今となってはほとんど見ることがない、というか、その存在すら忘却の彼方へと霞みつつあるレア・アイテムだ。

今回MC200を発見したネットショップは、イギリスにある「Trade In Post」という所(017)。URLは下記の通り。

<http://www.tradeinpost.com/index.html>

いやしかし、最初にこのショップのトップページを見た時は、さすがにちょっと引いたね……。まるで秋葉の





017

Johnの店のトップページ

イギリス在住のJohnが運営する「Trade In Post」のネットショップ。写真を見る限り、実際の店舗はかなり怪しいジャンク屋の雰囲気だ



018

ENIAC (エニアック) のリングカウンタモジュール

国立科学博物館で開催されている「テレビゲームとデジタル科学」展で展示されているENIACのモジュール。人の背丈以上の大きさがある。整然と並んだ真空管が圧巻！

ジャンク屋そのものっていう店構えだ。この怪しさには参った気に入った、というワケでさっそく発注したのだが、さすがにクレジット番号を送信する気は起こらない。メールにて相談したところ、幸いにもPay-Palに対応しているところだったので、事なきを得た。

ショップの風貌とは異なり、店主のJohnは気さくで親切な人だった。メールでの受け答えも丁寧だし、商品発送も迅速に対応してくれたので、とりあえず安心。後は商品が届くのを待つばかりである。せっかく貴重な製品が入手できたので、そのうち前フリもしくは後フリで概要をご紹介しますと考えている。



019

ENIAC (エニアック) の配線アップ

全て手づくり丁寧に半田付けされた配線のアップ。ハードウェアオタクにはたまりませんなあ~~~~~、(´ー`)ノ

🌀 おわりに (ENIACのこと)

上野にある国立科学博物館で、7月17日～10月11日の期間「テレビゲームとデジタル科学」展という催しが開催されている。さっそく見学してきたのであるが、これがまた筆者のようなレトロパソコン&レトロ電子機器フリークにはたまらない内容で、久々に興奮してしまった。

内容であるが、機械式計算機から始まり、初期の電子計算機、マイコン、パソコン、TVゲームへと体系的に展示されており、わかりやすい。特筆すべきは、あのペンシルバニア大学で稼働していた「ENIAC (エニアック)」の一部が展示されていることだ (018, 019)。真空管を17,000本使用したと言われているENIACは、前から一度どのようなものか見てみたいと思っていただけに、実物にご対面できるのはカンドーもんである！ しかも写真撮影可能な展示会なので、筆者などは「ハハハ」言いながらバシバシ撮影してしまった。美人モデルの撮影会でもあるまいに、ENIAC相手にコーフンしながらデジカ

メで写真を写しまくっていた筆者は、他の人からはさぞし奇異に見られたであろう……、(´ー`)ノ

展示されていたENIACは、フリップフロップを10個用いたリングカウンタモジュールである。人の背丈ほどもある細長いシャーシに、GT管が28本、整然と並んでいる。このモジュールが真空管面を内側にして縦に並べてラックにマウントされていたようだ。真空管面の反対側には、動作を示すネオンランプが並べて配置されているので、複数のモジュールがラックにマウントされた状態では、ネオンランプの点灯が全面パネルから見え、各ユニットの動作確認ができるようになっている。よく1950年代のSF映画に出てくるコンピュータは、パネル上に並んだたくさんのランプが点滅していたものだったが、あれはひょっとして、このENIACをベースに考えたのではないかとマジで想像してしまった。

その他、筆者が本誌夏号にてご紹介した、レトロTVゲーム機もたくさん展示されており、この内容で大人1,300円は絶対に安い！ 自他共に認める変人波多利朗イチオシの展示会なので、是非興味のある方はご覧になっていただきたい……合掌……